

共同体の書



# 目次

## 原初の頃

混沌とした世界	3
泥の人間	4
木の人間	6
フィン・ファンアプーとヴクブ・ファンアプー	
ポクタボク	10
四羽のミミズク	11
2つの川	13
4つの道	15
偽りの木像	16
歓迎の香	16
闇の家	17
刃の家	18
虎の家	18
火の家	19
氷の家	20
イシュキク	
樽の木	23
冥婚	24

地上へ	26
イシユムカネー	28
双子の誕生と成長	29
父の遺産	29
<b>冥界での挑戦</b>	
招待状	34
トウモロコシの誓い	36
2つの川 再び	37
4つの道 再び	37
偽りの木像 再び	38
歓迎の香 再び	39
<b>冥界の宿</b>	
闇の宿	42
刃の宿	43
虎の宿	45
火の宿	47
水の宿	48
コウモリの宿	50
<b>死の球技場</b>	
試合の当日	54
一人で戦う朝	56
試合の準備	57
兄の首	58

火あぶり	60
<b>新たな光</b>	
復活	63
芸人	63
冥界の行方	65
太陽と月	68
<b>人間の創造</b>	
原料を探す	71
人の世	72
後書き	74

原初の頃

## 混沌とした世界

まだ、天もなく、地もなかった。

水面の上に、静寂と闇とだけがあった。

すべては、ただ空（くう）のように澄み、

海は穏やかで、波も立たず、

何も動かず、何の音もなかった。

まだ、人も、獣も、鳥も、魚も、木も、石もなかった。

空も、地も、存在していなかった。

ただ、造り主と形成主――

「ハリツイス」と「グクマツ」だけがそこにおられた。

彼らは光の中ではなく、

闇の中でありながら、

言葉と心によって思考していた。

「大地があれば」と彼らは語った。

そして、言葉の力によって、

地は水の中から現れ、

山は立ち上がり、谷は落ち、

水は分かたれ、海と川が生まれた。

こうして、地が形を持ち、

草が芽吹き、木が伸びた。

太陽も月も、まだ昇ってはいなかったが、

世界は整いはじめた。

ついで、神々は鳥や獣を造った。

それぞれに住まいを与え、声を与えた。

「わたしたちを呼び、名を唱えよ」と神々は言った。

しかし、鳥や獣は語ることができず、

ただ鳴き声を発しただけであった。

神々は怒り、こう言った。

「お前たちはわたしたちの名を語らぬ。では、お前たちは他の者の糧となれ。」

こうして、動物たちは人に食べられる存在となった。

そして神々は再び語った。

「では、われらを讃え、語る者——言葉を持つ者を造ろう。」

## 泥の人間

—人間創造の試行錯誤—

はじめに、大地と天が分かたれた後、

創造主たち—ハツァヨム (Heart of Sky)、ククルカン (羽毛ある蛇)、ハリツマナマ (Maker)、トコワヒ (Modeler)—は語り合った。

「人間をつくろう。」

我らの名を呼び、感謝を捧げる者が必要だ。

その者たちは、我らの仕事を続け、

世界の秩序を守る存在となるだろう。」

こうして、神々は幾度かの創造と失敗を繰り返していく。

泥 (粘土) の人間

「さあ、人間をつくろう。」

我らを呼び、我らを崇める者が必要だ。

彼らが我らの名を覚え、祈りを捧げるようにしよう。」

そして彼らは土と泥を集め、

それをこねて人の形を作った。

神々は言った。

「これでよい。彼らは歩くことができるか？」

泥の人間たちは立ち上がり、少しの間歩いた。

だがすぐに、その体はふらつき、崩れはじめた。

雨が降ると体は溶け、

太陽に照らされるとひび割れた。

「話せるか？」

神々が尋ねると、彼らの口は開いた。

ただ出てくるのは、意味をなさぬ音だけだった。

舌は柔らかく、言葉を作ることができなかった。

「心を持つか？」

泥の人間たちは何も答えなかった。

彼らの中には息も魂もなく、

ただ形ばかりがそこにあった。

神々は言った。

「これはうまくいかなかった。

泥では強くならない。

乾けば壊れ、濡れれば崩れる。」

そして神々はその創造を壊し、

泥の人間たちを大地へ戻した。

こうして、**最初の創造は失敗に終わった。**

神々は再び相談を重ねる。

## 木の人間

神々は、最初の泥の人間が崩れ去ったのを見て、再び語り合った。

「今度こそ、しっかりした体を持つ者を作ろう。  
立ち、歩き、言葉を話し、我らを呼ぶ者が欲しい。」

彼らは木と葦を集め、  
それを削り、形を整えて人の姿をつくった。  
そして神々の息を吹き込み、命を与えた。

すると木の人間たちは立ち上がり、  
歩き、話しはじめた。

「見よ、彼らは言葉を話している。  
歩いている。  
これこそ人間だ。」

神々は喜んだ。  
だが、すぐに気づいた。

これらの木の人間には、**心がなかった**。  
血も、感情も、思いやりもなかった。

彼らは創造主を忘れ、  
祈ることも感謝することもなかった。  
ただ動き、言葉を並べ、  
空しく日々を過ごした。

「彼らには知恵がない。  
我らの名を呼ばぬ者たちだ。  
この者たちは、我らの創造を讃えぬ。」

神々は怒り、破滅の命を下した。

大地は声を上げた。

山々は震え、木々は倒れ、  
人々の家が崩れ落ちた。

木の人間たちは逃げ惑った。

しかし、彼らが日々使っていた**道具や動物**たちが、  
次々と彼らに襲いかかった。

石の白が言った…

「おまえはいつも私を酷使した。

今こそ報いを受けよ！」

白は転がり、彼らの頭を砕いた。

鍋が叫んだ…

「おまえは私の腹を焼いた！

今度はおまえの顔を焼いてやろう！」

鍋は火の中から飛び出し、彼らを焼き焦がした。

犬が吠えた…

「おまえは私を鞭で打ち、

飢えさせた。

今度はおまえの骨を噛んでやる！」

犬たちは木の人間に飛びかかり、噛み裂いた。

七面鳥が鳴いた…

「おまえは私の羽をむしり取った！

今こそおまえの髪をむしってやろう！」

そして、家の柱までもが怒りを語った。

「おまえたちは私を支えとして使ったが、感謝をしなかった。

今こそ倒れて、おまえを押しつぶす！」

滅びと変化

嵐が吹き荒れ、木の人間たちは叫びながら逃げた。

しかし逃げ場はなく、

彼らは山へ、森へ、木々の間へと追いやられた。

彼らの体は次第に変わり、

柔らかな木の枝のようになっていった。

そして神々は言った。

「彼らは心なき者。

人の姿に似ていても、魂を持たぬ。

彼らの末は森の獣とならん。」

こうして木の人間たちは滅び、

その子孫がサル（猿）となった。

今も森の中で木を渡り歩く猿たちは、

神々が失敗した『最初の人間の名残』とされている。

フン・フンアププーとヴクブ・フンアププー

## ポクタポク

昔々、地上には二人の兄弟がいた。

兄の名はフン・フンアププー、

弟の名はヴクブ・フンアププー。

父の名は、イシユピヤツコク、母の名はイシユムカネー

兄には妻が居た。妻の名は、イシユバキャロ

兄夫婦には、二人の子共がいた。

名は、フンバツツ、フンチョウエン。

兄弟は賢く、力強く、球技にかけては誰にも負けなかった。

彼らはいつも広場で球を打ち合い、

その音は天と地を揺るがし、

ついには冥界シバルバの王たちの耳にも届いた。

——その日、球の音が天を震わせた。

乾いた地に響くその響きは、

太陽の鼓動のようであり、

トウモロコシの根が地の奥に伸びる音のようでもあった。

フン・フンアププー、ヴクブ・フンアププーは、

球を打ちながら歓びに満ちていた。

それは遊戯ではなく、儀礼——

天地の秩序を呼び覚ます祈りであった。

だが、その音は冥界まで届いた。

地下の宮、シバルバ。

そこにはフン・カメーとヴクブ・カメー、

血と腐敗を司る二人の王が座していた。

彼らはその音を聞き、顔を曇らせた。

「誰が、我らの静寂を乱すのか。」

## 四羽のミミズク

フン・フンアプブー、ヴクブ・フンアプブーは、球を打ちながら歓びに満ちていた。

だが、その音は冥界まで届いた。

地下の宮、シバルバ。

そこにはフン・カメーとヴクブ・カメー、血と腐敗を司る二人の王が座していた。彼らはその音を聞き、顔を曇らせた。

「誰が、我らの静寂を乱すのか。」

「誰が、死の国の上で太陽を呼ぶのか。」

怒りは闇を震わせ、

その震えは骨のような風となった。

そして、王たちは使者を呼んだ。

闇の翼を持つ四羽のミミズク——

テカロ、パチ、ホロム、ツイウ。

それぞれが夜の方角を司り、

死者の言葉を運ぶ鳥たちであった。

ヴクブ・カメーは言った。

「行け。地上の球を打つ者たちを見つけよ。

我らが彼らを試みる。

彼らを我らの宮に招け。」

ヴクブ・カメーは続けた。

「彼らにこう告げよ——

冥界の主たちは、お前たちの技を讃え、

共に球を打ちたいと望んでおられる、と。」

四羽のミミズクは頭を垂れ、  
静かに翼を広げた。

その羽音は夜を切り裂き、  
冥界の煙を巻き上げた。  
やがて彼らは地上へと舞い上がる。

月はまだ眠り、星は青ざめていた。  
ミミズクたちは山々を越え、  
霧と朝露を裂きながら進んだ。  
その瞳は火のように光り、  
その声は影のように低く響いた。

「フン・フンアフプー、ヴクブ・フンアフプー。  
シバルバの主たちは汝らを招く。  
その腕前を、冥き地で見せてみよ。」

兄弟は球を止め、空を仰いだ。  
風が静まり、森が耳を澄ませた。  
フン・フンアフプーは言った。  
「冥界の主たちの招きか。それは榮譽である。」

だがフン・フンアフプーは、  
沈黙の中で遠くの空気を感じ取った。  
香のような、血のような匂い——  
死の国から立ちのぼる気配だった。

彼は静かに球を拾い、  
弟に言った。  
「ならば行こう。  
もし我らの技が神々の意志なら、  
冥界の主のもとでも光は失われぬ。」

そして兄弟は拍子木を携え、  
トウモロコシの粉を胸に忍ばせ、  
冥界への道へと歩み出した。

四羽のミミズクは後を導く。  
彼らの影が地を撫で、  
木々の葉がその名を呟いた。

——こうして、

運命の儀礼は始まった。

血と夜の国へ向かうその旅こそが、  
再生の輪の第一の音だった。

二人はまだ知らない、そこから生きて帰れぬ事を

## 2つの川

——その朝、空の骨はまだ湿っていた。

風は低く唸り、地の奥から呼ぶ声があった。

それはシバルバ——闇の主たちの国。

血と影の宮に住む者たちが、球の音を憎み、  
地上の兄弟を招いたのだった。

フン・ファンアプブーとヴクブ・ファンアプブーは、

球と拍子木を携え、沈黙の道を進んだ。

彼らの影はゆっくりと細り、

やがて冥界の門に届く。

そこには二つの川が流れていた。

一つは**血の川**。

流れは赤く、熱を運び、

人々の怒りと犠牲の記憶を運んでいた。

波の音は心臓の鼓動のようで、

その上に霧が、命の未練のように漂っていた。

兄弟は立ち止まり、

足元の水に手を差し入れた。  
指先を濡らすその感触は、  
人の誓いと裏切りの味をしていた。  
彼らは互いに目を合わせ、  
球を抱いて一步を踏み出す。

血の流れが足を包み、  
その熱が脈の奥に届く。  
それでも彼らは進んだ。  
神々の子として、血を恐れぬことこそが、  
秩序の始まりであった。

やがて、二つ目の川が現れた。  
**膿の川**——その色は灰に似て濁り、  
腐った花の匂いを放っていた。  
そこには、死の記憶と腐敗の息が満ちていた。  
皮膚の下に眠る恐怖が呼び覚まされ、  
魂そのものが後ずさるようであった。

ヴクブ・フンアププーは言った。  
「これは生の終わりのかたちだ。」  
フン・フンアププーは頷き、  
トウモロコシの粉を川に投げ入れた。  
白い粉は光となり、  
流れの上に淡い橋を描いた。

兄弟はその上を渡った。  
足跡はすぐに溶け、  
残ったのは香煙のような影だけ。  
その影が、風の中でかすかに揺れた。

こうして二つの川を越えた。

## 4つの道

こうして兄弟は、球を携え、四つの道の前に立った。

赤の道は朝の血を湛え、

白の道は骨の粉を散らし、

黄の道は熟れた穀の香を放ち、

黒の道は夜の底から息をついていた。

そのとき、黒の道が語った。

——「こちらへ来よ。」

こここそが、王たちの座へ続く真の道。」

声は柔らかく、闇の乳のように甘かった。

兄弟の胸に響くそれは、

亡き祖の呼び声にも似ていた。

フン・ファンアプブーは耳を傾け、

「この道は生きている」と囁いた。

ヴクブ・ファンアプブーは球を抱きしめ、

「それでも、進まねばならぬ」と応えた。

黒の道の下には、数え切れぬ命の影が這っていた。

かつて挑み、還らなかつた者たちの夢、

その夢が風となり、

兄弟の足を撫でた。

やがて彼らは冥界の門に至る。

そこは光の届かぬ淵、

言葉が影となる境界。

門の奥で、ヴクブ・カメーが微笑んだ。

「来たか——球の音を絶やす者どもよ。」

そして闇は閉じた。

四つの道は静まり返り、

ただ黒の道だけが、  
誇らしげに星の死骸を飲み込んだ。

——こうして、

フン・フンアプブーとヴクブ・フンアプブーの影は  
冥界へと沈んだ。

だがその沈黙の底で、  
まだ小さな光が脈打っていた。

## 偽りの木像

ついに彼らはシバルバの王宮に辿り着いた。

玉座に二人の主が並んでいるのを見て、兄弟は跪き、挨拶した。  
しかし、それらは**木で作られた人形**であった。

本物の主たちはその後ろで嘲笑していた。

「見よ、愚かなる者たち。

木の像に頭を下げたのだ。」

兄弟は罨にかかり、最初の試練に敗れた。

## 歓迎の香

王たちはさらに彼らに命じた。

「この香炉に我らの香を焚け。」

フン・フンアププー、ヴクブ・フンアププーの兄弟は香を受け取り、火をつけたが、それは**毒草と石粉**でできており、煙は彼らの目を焼き、意識を奪った。

## 闇の家

最初の家は「闇の家」。(その家には、光というものがまったくなかった。そこは深い闇に包まれ、夜そのものようであった。)

どこを見ても何も見えず、手を伸ばしても己の指さえ見えなかった。そして、シバルバの主たちはこう命じた。

「今夜はこの家で夜を明かすがよい。」

夜明けまで火を灯し、タバコを吸って過ごすのだ。

もし、火が消えたり、タバコを吸い尽くしたならば、

そのとき、おまえたちの命はここまでだ。」

フン・フンアププー、ヴクブ・フンアププーの兄弟はその言葉を受け、闇の家の中に閉じこめられた。

しかし、そこには火を灯すための薪も、光もなかった。

手にしたタバコは闇の中で消え、

彼らの火はすぐに絶えてしまった。

彼らは火を守ろうとしたが、暗闇はそれを飲み込み、

もはや夜と朝の区別さえわからなくなった。

そして、夜明けが来たとき、彼らは命令を果たせなかった。

シバルバの主たちは怒り、こう言った。

「おまえたちは、我らの言葉を守らなかった。

火を絶やした者に、生きる資格はない。」

## 刃の家

次の家は「刃の家」。(黒曜石の刃が風のように飛び交い、一瞬でも動けば切り刻まれる。)そこには、無数の刃が並んでいた。

それらは刀でも槍でもなく、

自らの意志をもって**動き、斬りつける刃**であった。

彼らが部屋に足を踏み入れると、

その刃たちは一斉に震え、音を立てて動き出した。

シバルバの主たちは言った。

「この夜を、この刃の家で過ごすが良い。

おまえたちはここで眠るのだ。

だが、もし刃に斬られずに夜明けを迎えられるなら、

そのとき、おまえたちの勇気を認めよう。」

兄弟は恐れた。

その部屋の壁も床も、動く刃で覆われていた。

休むことも、身を横たえることもできなかった。

彼らは互いに寄り添い、闇の中で身を守ろうとしたが、

夜の間に刃は音を立て、唸り、光を放ちながら近づいてきた。

彼らは夜明けまで、刃に傷つけられた。

## 虎の家

さらに「虎の家」。(飢えたジャガーが唸り、兄弟を狩るように取り囲んだ。)の家の中には、数えきれぬほどの虎(ジャガー)がいた。

それらは巨大で、牙は鋭く、目は炎のように光っていた。

シバルバの主たちは言った。

「今夜はこの家で過ごすが良い。

もし夜明けまでに、これらの虎に食われずにいられたなら、そのとき、おまえたちを生かしてやろう。」

扉が閉ざされ、闇の中で虎たちは動き始めた。

兄弟の体のまわりを巡り、

吠え、牙をむき、唸り声を上げた。

フン・ファンアプブーとヴクブ・ファンアプブーは逃げ場を探したが、どこにも隠れる場所はなかった。

虎たちはますます近づき、

その目は彼らの体を照らすように光った。

そして、夜が深まるとともに、

虎たちは一斉に飛びかかり、

二人を引き裂いてしまった。

シバルバの主たちはそれを見て笑い、言った。

「見よ、これが我らの勝利だ。

球戯場の音など、もう聞こえぬだろう。」

## 火の家

そして「火の家」。(炎が息を呑むほどの熱で燃え上がり、空気さえも灼熱に変わる。)

そこは炎に包まれ、壁からは火が吹き出し、床の石の割れ目からも赤い舌のような炎が立ち上がっていた。冥界の主たちは冷たく笑いながら命じた。

「この家で夜を過ごせ。  
お前たちが生きて朝を迎えられるなら、  
我らの尊敬を受けるにふさわしい。」  
そう言うと、扉が閉ざされ、逃げ場はなくなった。  
二人は炎の中に閉じ込められた。  
彼らは火を鎮めようとした。  
身を守る術を探したが、冥界の炎は人の火ではなく、  
生きてうごめく「神々の炎」であった。  
夜が更けるにつれ、火は強く燃え、  
兄弟の衣を焼き、肌を焦がし、  
やがてその身を黒く包み込んだ。  
朝が来ると、冥界の主たちは扉を開いた。  
そこにいたのは、すでに焼け焦げた二人だった。  
「見よ、これが神々の力だ。  
二度と地上で球を打つことは叶わぬ。」

## 氷の家

最後は「氷の家」。(凍てつく風が皮膚を裂き、冷気が骨まで貫いた。)  
家の中は息をすれば肺が凍るほどの寒さであった。  
壁も床も氷に覆われ、  
一歩ごとに足が凍りつき、  
言葉を発しようとする舌が貼りついた。  
死の神々は外から声をかけた。  
「お前たちがこの夜を越えられるなら、  
我らはお前たちを称えよう。  
だが、凍りついた者の魂は、決して地上に帰らぬ。」  
兄フン・ファンアプブーは弟に言った。  
「火の家では炎が我らを焼き、  
今度は氷が我らを締めつける。」

これは神々が我らを苦しめるための術だ。」

弟ヴクブ・フンアプブーは震えながら答えた。

「兄上、身を寄せ合えば温まるだろうか。」

二人は互いを抱きしめ、身を丸めて耐えたが、

闇の冷気は血の流れを止め、骨の奥まで凍らせた。

やがて夜が明けた。

冥界の主たちが扉を開けると、

そこには氷に包まれ、動かぬ兄弟の姿があった。

「見よ、火にも焼かれ、氷にも凍えた者たちだ。

これでよい。彼らは人の身でありながら神々に挑んだ。」

嘲りの笑いを上げ、

彼らの身体を引きずり出した。

彼らはこれらの試練を生き延びることができなかった。

主たちは喜び、兄弟を捕らえてた。

イシユキク

## 樽の木

冥界の主フン・カメーとヴクブ・カメーは命じた。

「もう十分だ。」

フン・フンアププー、ヴクブ・フンアププー

君らは、我らを楽しませた。

だが、これ以上は生かしておく理由がない。」

すると、シバルバーの戦士たちは兄弟を地にひざまずかせ、その場で刃を振るった。

一瞬のうちに、フン・フンアププーの首は切り落とされ、転がり落ちた。

弟ヴクブ・フンアププーは叫んだが、すぐに捕らえられ、

冥界の主の命令で彼もまた斬られた。

こうして、兄弟は共に命を絶たれた。

首を手を取ったのは、死の神フン・カメーであった。

その首を見て、彼は言った。

「これが、地上の者どもが誇る知恵と力の果てか。

だが、この首には力がある。

我らの球戯場の木に掛けよ。

その力を我らのものとするのだ。」

神々は命じ、

冥界の球戯場の中央に立つ大木――

「瓜の木（マカイツェ / Calabash Tree）」の枝に、

フン・フンアププーの首を吊るした。

首はそこで乾き、骨となり、

やがて不思議なことに、木の枝に果実が実り始めた。

その果実は丸く、淡く光り、吊るされた首と同じ形をしていた。

誰もその果実を区別できず、木全体が首のような実で覆われた。それを見た者は皆、恐れと畏れを抱いた。

その後、死の神々は告げた。

「誰もこの実に触れてはならぬ。これは死の印だ。食べる者は死ぬ。」

## 冥婚

冥界シバルバーの奥深くに、ひとりの乙女がいた。彼女の名はイシュキク (Ixkik) 、

「血の乙女」「月の娘」と呼ばれる存在であった。彼女は死の神ククマツィック (Cuchumatzic) の娘であり、若く、美しく、知恵を備えていた。

ある日、イシュキクは、冥界の森を歩いていると、他の娘たちから奇妙な話を聞いた。

「あの大木に近づくでない。

それは呪われた瓜の木。

フン・フンアプーの首が掛けられ、その実には死の力が宿っているのだ。」

しかし、イシュキクはその言葉に興味を抱いた。

「死の木がヒカロの果実を実らせるというのなら、その木は死ではなく、生命の木ではないの？」

そう言って、

彼女は冥界の球戯場の中央に立つ大木、禁じられた木の前に立った。

木の枝には、丸い実が数多く実っていた。どれも黄金色に輝き、甘い香りを放っていた。そしてその中の一つが、まるで彼女を見つめるように揺れていた。それが――フィン・ファンアプーの首であった。

すると、首が語りかけた。

「なぜここへ来たのか、乙女よ。」

イシュキクは恐れずに答えた。

「あなたの話を聞きました。あなたは人でありながら神々に挑み、いまはこの木の実と化したと。」

首は静かに笑った。

「そうだ。だが、私の死は終わりではない。私の種はまだ地に残っている。その種を受け継ぐ者が現れるだろう。」

イシュキクは首を見つめ、さらに近づいた。すると首は言った。

「手を差し出せ。」

彼女が手を差し出すと、首は唇から息を吹きかけた。その息は彼女の掌に触れ、胸に届き、体の奥深くへと流れた。

その瞬間、イシュキクの腹には、新たな命が宿った。

驚いたイシュキクは胸に手を当てた。

「これは……？ どうして私は熱を感じるの？ これは火ではなく、光のような……命の息……。」

首は答えた。

「それが、私の子らだ。

彼らは私の名を継ぐ者。

彼らがシバルバーを倒し、私の死を超えるだろう。」

イシュキクは涙を流し、祈った。

「ならば、私はこの命を守ります。

あなたの言葉が果たされるその日まで。」

## 地上へ

夜は冥界の毛布のように厚く、火の息だけが街路を照らしていた。

シバルバーの玉座には、フン・カマーとヴクブ・カマーが座る。彼らの顔は鉛のように冷たく、言葉は石のように重い。

「その女の心臓を持って来い」——命令は風に乗り、洞窟の隅々まで届いた。

言葉は命令となり、命令は行為を生む。これが冥界の法である。

処刑の役を負ったのは、夜の使者——フクロウの仮面をかぶる者たちだ。羽音は礼拝の太鼓のように低く、目は月の穴のように闇を穿った。彼らは震える手で縄を持ち、王の前へと行く。だが、人の目には見えぬものを見、心に触れるとき、躊躇が生まれる。処刑人たちもまた、ただの骨と肉を斬る者ではない。彼らは儀礼の器であり、言葉と罪を運ぶ者だ。

イシュキクは檻に入れられていた。彼女の腹は密やかに膨らみ、そこに小さな鼓動が芽生えている。彼女は黙して歌わず、しかし目は海のように深かった。冥界の法は無慈悲だが、言葉には柔らかさがある。言葉は曲がり、曲がることで道をつくる。

処刑の朝、処刑人たちは彼女の前に立った。彼らの顔は仮面の影で半分隠れている。だがその手は震え、刃を向けることを最後までためらった。イシュキクはそれを見て静かに言った。

「見せるがよい。だが、真の心臓は不要。赤きものは、ここにある。」

彼女は皮袋を差し出した。皮袋の中身は、樹の樹脂——生きた木の血だった。古い女たちの言葉に従えば、樹脂は大地の血であり、滴る赤は生命の模造である。処刑人たちは迷いながらも、その赤を見て思った。樹の血ならば、罪は穢れを洗い、儀礼は満ちるかもしれない。彼らは樹脂を拾い、炎の前に置いた。

炎は古い歌を口ずさむ。樹脂が熱せられると、粘りと赤が泡立ち、煙が立ち上る。煙は顔を隠す。樹脂は煮え、焦げ、赤い塊が黒い鍋の中で踊る。処刑人たちはその塊を王の前に差し出す。玉座の光がその塊に当たり、肉のように柔らかく見えた。光は嘘を照らすのが得意だ。王たちは覗き込み、眼差しが変わる。

「よい。これは心臓だ」——王の声は重く、満足がその奥にある。命令が満たされたとき、世界はひとつ輪を成す。処刑の徒は安堵の影を落とし、紐を解いて彼女を引き上げるふりをする。だが彼らは本当に刃を振るわなかった。刃は空を切り、刃の冷たさは胸を凍らせることなく消えた。

イシュキクはその場で笑わなかった。笑いは軽い。代わりに彼女は祈りを吐き、口の端で小さな歌をつむいだ。歌は胎内の鼓動へ向けられ、歌声は母の灰と同じ節回しで子呼び覚ます。処刑人たちは、彼女を連れて去るふりをする。だが道の途中、彼らは闇に溶けるようにして姿を消した。フクロウの仮面は闇の中で落ち、夜の風がそれを飲み込んだ。

王たちはいぶかしがった。だが彼らの前には「心臓」がある。儀式は完了したとみなされる。言葉は形を取った。形はまた言葉を呼ぶ。神々の法はここで満たされた。冥界の秩序は一瞬、平衡を取り戻したかに見えた。

しかしその夜、空には別の動きがあった。川は囁き、風は種を運ぶ。イシュキクは密かに逃げ延び、トウモロコシの畝の間に身を隠す。畝は母の手のように彼女を抱き、土は温かく答えた。胎内の小さな鼓動は強くなり、火で消えぬ命の芽は静かに伸びていった。トウモロコシの葉が子の祝福となり、月は柔らかにその背を照らした。

この欺きはただの逃走術ではない。イシュキクの知恵は儀礼そのものを読み替えた。心臓は生命の核であり、だがそれは一つの形に限らない。樹の樹脂もまた生の象徴であり、血の模造は神々の目を満たすことができる。処刑人たちを動かしたのは憐れみと恐れ、そして儀礼への信仰だ。彼女はその信仰を逆手に取って、命を守った。

この夜、王たちは満足した。彼らは自らの権威が再確認されたと信じた。だが世界の深みでは別の秩序が動き出していた。言葉は嘘にも真にもなり、血は樹にも人にも宿る。イシュキクの腹に宿った命は、やがて物語を揺るがす力となる。儀礼はその場では満たされたが、宇宙の均衡は新しい節目へと向かった

のだ。

そして、語り部はこう結ぶ。

「大地の血は様々な器に満ちる。真の心臓は、捧げられたかのように見えても、いつでも別の場所で脈打ち得るのだ」と。

## イシュムカネー

イシュキクはついに地上へ出た。

そこは、フィン・フンアププーとヴクブ・フンアププーの母

——イシュムカネー（Ixmucané）——が暮らす地であった。

彼女は大いなる祖母、知恵と糧の女神である。

イシュキクは家の前に立ち、呼びかけた。

「イシュムカネーさま、私はあなたの息子フィン・フンアププーの子を宿しております。どうかお受け入れください。」

だが、イシュムカネーは信じなかった。

「そんなことがあるはずがない。

我が息子たちはシバルバーで死んだ。

あなたの言葉は嘘だ。」

イシュキクは言葉を失わなかった。

「では、私が真実であることを示しましょう。

ここにトウモロコシの穂を植えます。

それが芽吹けば、あなたの息子の命が私の中にある証です。」

彼女がトウモロコシを植えると、  
その穂はたちまち芽を出し、実を結んだ。  
イシュムカネーは驚き、

「この芽は、確かに我が息子たちの魂が受け継がれている証だ。」  
と涙を流し、彼女を家に迎え入れた。

## 双子の誕生と成長

生まれた子は、

フニアフプー (Humahpú) とイシュバランケー (Xbalanqué) であった。

二人は幼い頃から特別な力を持っていた。

双子は笛や太鼓を奏で、

鳥や獣、魚を呼び寄せることができた。

彼らは大地に命を与えるかのように遊び、  
狩りや魔術に長けていた。

絵や彫刻を作ることもできた。

## 父の遺産

双子の兄弟フニアフプーとイシュバランケーは、  
母と、祖母イシュムカネーとともに暮らしていた。

彼らは日々、森で狩りをしたり、

小鳥を捕まえたりして遊んでいた。

ある朝、彼らは家の中で

古い物音を耳にした。

祖母がとうもろこしをついている倉の奥から、不思議な響きが聞こえたのだ。

兄弟が中を覗くと、

埃をかぶった古い袋が置かれていた。

その中には――

父たちの球技用の具があった。

木でできたバット、輪、

そしてゴムの球（ポクタポクの球）。

英雄双子フンアププーとイシュバランケーは、静かに顔を見合わせた。

「祖母と母は、球技を禁じている。

けれど、父たちの球が呼んでいる。」

フンアププーの声は、風のように低く響いた。イシュバランケーは頷き、

「球は我らの血。神々の記憶が宿る。

ならば、奪われたものを取り戻そう。」

二人は小さな策略を立てた。

朝露が草を濡らすころ、

祖母イシムカネーと母イシュキクに言った。

「おばあさん、母さん、

わたしたちは喉がかわいた。

川の水を飲んでみてください。」

二人は素直にうなずき、

大きな水瓶を抱えて家を出た。

しかし、双子はあらかじめ瓶の底に細い穴をあけておいた。

川へ向かう道はぬかるみ、水面は月のように光っていた。けれど、水をくもるとするたびに、瓶はすぐに空になってしまう。いくらくんでも満たされない。

「おかしいね……」

イシュキクがつぶやくと、

瓶の中から、川の精の笑い声が聞こえた。

「その器は、もう地に縛られている。」

母と祖母が川に心を奪われているその間に、双子は家へ戻った。

家の梁の上には、

父たちが使っていた球技の道具が吊るされていた。

縄は蜘蛛の糸のように強く、指で引いても切れない。

フンアプーは耳を澄ませて呼んだ。

「小さき者よ、来てくれ。」

暗がりの奥から、一匹のネズミが姿を見せた。目は赤く、夜の火のように光っていた。

「この縄を切ってくれ。」

我らに力を貸してほしい。」

ネズミは前歯で縄を噛み切り、音もなく落とした。

拍子木と球が地に転がり、その響きは家中を満たした。

それはまるで、

太陽が胸の奥で跳ねたような音だった。

双子は顔を見合わせ、

長い間失われていたものを手に入れた喜びを、  
ただ静かに感じていた。

そのとき、川の方から声がした。

「水が満たされぬ、どうしてだろう……？」

祖母と母が戻るころ、

双子はもう外へ出ていた。

「それには触ってはいけない！

それはおまえたちの父たちの道具なのだ！

あの方たちは、それで命を落としたのだよ！」

しかし、双子は聞かなかった。

「いいじゃないか、遊ぶだけだよ。」

二人は家の外へ出て、

空き地に出ると球を打ち始めた。

胸板で打つたびに、

ボールは空高く跳ね上がり、

木々の間をくぐり、音を立って弾んだ。

それは地の底まで響いた。

冥界シバルバーの主たちまでもがその音を聞いた。

# 冥界での挑戦

## 招待状

シバルバーの冥界の主、怒りの声を上げる

冥界では、

フン・カマー（**Hun-Came**）とヴクブ・カマー（**Vuub-Came**）が  
その音に顔をしかめた。

「まとも球の音か！

昔、あのフン・フンアフプーとヴクブ・フンアフプーが  
我らを騒がせた。

まさか、あの者たちの息子ではあるまいな？

呼び寄せよ。死の球戯の庭で、彼らの力を試すのだ。」

四羽のミミズクが選ばれた。

その目は夜の星のごとく、翼は死の風のように静かだった。  
彼らは地上へ昇り、老女イシムカネーの家を訪れた。

老女は火の傍らに座り、

乾いたトウモロコシをすり潰していた。

灰の中には、過ぎ去った日の記憶が燃えていた。

ミミズクたちは、黒い声で言った。

「冥界の主たちが呼んでいる。

おまえの息子たち、フンアフプーとイシユバランケーを、  
血の川と膿の川の向こうへ招待せよ。」

老女の胸に、冷たいものが沈んだ。

だが冥界の主たちの言葉を拒むことは、死よりも重い罪だった。

イシムカネーは静かにうなずき、

火に一片のトウモロコシの粉を投げ入れた。

炎が揺らめき、ひとつの決意が生まれる。

「わたしの口では、子らを死へ導きたくない。だが言葉は伝えねばならぬ。」

老女は掌にいた小さな虱を見つめ、囁いた。

「おまえにこの言葉を託そう。」

フンアフプーとイシュバランケーに伝えるのだ。

冥界が彼らを呼んでいると。」

虱は震えながらうなずき、旅に出た。

だが、その脚は短く、道は長く、

森の湿気がその息を奪った。

そこへ一匹のガマが現れた。

「小さき者よ、わたしの腹に入るがいい。」

おまえの声を、わたしが遠くまで運んでやろう。」

虱は感謝してガマの口に入り、

ぬめる闇を進んだ。

やがてそのガマを一匹の蛇が呑み、

蛇を一羽の鷹が裂いた。

鷹の翼が太陽の光を掴んだとき、

その中から小さな声が解き放たれた。

風がそれを運び、

ついに双子のもとへ届いた。

「フンアフプー、イシュバランケー、

冥界の主たちがおまえたちを呼んでいる。

血の川と膿の川を渡り、

死の球戯の庭でおまえたちを待っている。」

フンアフプーは空を仰ぎ、

「父たちの名において、我らもその道を歩もう。」と言った。

イシュバランケーは静かに応えた。

「運命は声となり、闇を越えて届くのだ。」

二人はまだ知らない、そこから生きて帰れぬ事を

## トウモロコシの誓い

——朝の光がまだやわらかいころ、家のまわりは静まりかえっていた。風も音を立てず、トウモロコシの葉がかすかに揺れていた。

フンアフプーとイシュバランケーは、冥界へ向かう支度を整えていた。球と拍子木を置くと、兄のフンアフプーが言った。

「出かける前に、これをしよう。  
この家の中にトウモロコシを植えよう。  
もし芽が伸びたら、わたしたちは生きている。  
もし枯れてしまったら、冥界で果てたと思ってほしい。」

弟のイシュバランケーは静かにうなずき、手で土を掘り、二人はそこに種を入れた。小さな穴に、彼らの息と願いを吹き込むように。

「この土が、わたしたちの行く末を教えてくれるだろう。」  
フンアフプーはそう言って、手のひらで土を覆った。

イシュキクはかすかに笑ったが、その目には涙のような光があった。  
「芽が出たら、神々に感謝して火を焚こう。  
枯れたら、煙を天に上げて祈るよ。」

三人はしばらく黙って、  
風に揺れる葉の音を聞いていた。

やがて兄弟は立ち上がり、球を背に背負って家を出た。  
祖母はその背を見送りながら、  
植えたばかりの畝に手を当てる。

——土の中で、種は静かに眠っていた。

芽吹くか、枯れるか。

それは、生と死のあいだで揺れる小さな祈りだった。

## 2つの川 再び

途中には恐ろしい川が二つ流れていた。

一つは**血の川**（Xiquiripat）

もう一つは**膿の川**（Cuchumaguc）

彼らはそれを竹の棒で渡り、  
水に触れずに進んだ。

## 4つの道 再び

やがて、彼らは四つの道が交わる場所に出た。  
それぞれの道が、異なる色の光を放っていた。

一つは**赤い道**（東）

- 一つは黒い道（西）
- 一つは白い道（北）
- 一つは黄色い道（南）

その時、四つの道が声をあげて語りかけた。

「こっちへおいで、英雄たちよ。」

「こちらがシバルバーへの正しい道だ。」

それは冥界の神々が仕掛けた**幻惑の罠**だった。

しかし、双子は父たちの失敗を知っていた。

フニアフプーは耳を澄ませ、

イシュバランケーは大地に息を吹きかけた。

そして、黒い道の声に従わず、

慎重に進み、**正しい道（中央の細い道）**を選んだ。

「偽りの声に惑わされるな。

我らは心の光で進むのだ。」

## 偽りの木像 再び

やがて彼らは冥界の広場に着いた。

そこは暗く、湿り、

不気味な静寂に包まれていた。

門の前には、

死者の主たちの像が並んでいた。

双子はそれらを神々だと思い、  
挨拶をした。

「おはようございます、シバルバーの主たちよ。」

しかし、それはただの木像だった。

冥界の神々は高みからそれを見て笑った。

「見よ、あの者たちは像に挨拶している！

愚かな父たちと同じだ！」

だが双子はすぐに気づき、

笑って言った。

「違う。おまえたちこそ木のように冷たい心を持っている。」

## 歓迎の香 再び

シバルバーの冥界の主たちは双子を迎え入れた。

その主は二人の王、

フン・カメー（**Hun-Came**）とヴクブ・カメー（**Vuub-Came**）であった。

彼らは偽りの使者たちに命じた。

「彼らに歓迎の火を渡せ。」

しかし、その火の中には灰と松脂が混ぜられており、  
触れれば爆ぜる罠であった。

父たちはその火で焼け死んだ。

双子はそれを見抜き、  
火に息を吹きかけ、灰を地面に散らした。

冥界の王たちは驚いた。

「なるほど、こやつらは父たちとは違うようだ。」

冥界の宿

## 闇の宿

その夜、

冥界の主は双子を闇の家 House of Darkness に泊ませた。

「夜明けまで、この中で過ごせ。」

もし光を灯せば、明日おまえたちの命はない。」

家の中は真っ暗で、

何も見えず、

息をするたびに冷気が肌を刺した。

しかし双子は知恵を使った。

彼らは赤い羽（トウモロコシの花粉）を燃やし、

まるで松明のように見せかけた。

朝になると神々が言った。

「灯りをつけただろうか？」

双子は答えた。

「いいえ、これは火ではありません。」

我らの心の光です。」

冥界の主たちは顔をしかめた。

「……なるほど、やはり侮れぬ。」

## 刃の宿

冥界の王フン・カメーとヴクブ・カメーは、  
こう言ってフナフプーとイシユバランケーを呼んだ。

「次の宿を用意してある。

そこは**刃の家**（**House of Knives**）。

今夜はそこに泊まるがよい。

もし明日の朝、無傷で出てこられたならば、

我らはお前たちを認めよう。」

兄弟はその言葉に従い、

刃の家の扉をくぐった。

中に入ると、

そこには幾千もの**鋭い刃**（**obsidian blades**）が、  
床にも壁にも突き立っていた。

それらはまるで生き物のように、

唸り声をあげながら動き回っていた。

刃は兄弟たちの方へと跳ね、

切り刻もうとした。

冥界の主たちは外で笑っていた。

「今ごろあの者たちは切り裂かれているだろう。」

だがフナフプーとイシユバランケーは恐れなかった。

彼らは小さな鳥——**蟻鳥**（**the small biting bird, “t n unun”**）——を呼び寄せた。

フナフプーはその鳥に語りかけた。

「小さき鳥よ、

どうか我らの友となれ。

おまえは刃の精たちに語りかけ、

我らに危害を加えぬよう頼んでくれ。」

鳥は頷き、刃たちに囁いた。

「おまえたちよ、眠れ。

彼らはおまえたちの敵ではない。

明日まで休むのだ。」

すると刃たちは次第に静まり、

その音も止まった。

家の中は安らぎに包まれた。

兄弟は夜明けまで無傷で過ごした。

夜が明け、冥界の主たちは扉を開けた。

「どうだ？ お前たちはまだ生きているか？」

フンアプーが笑みを浮かべて出てきた。

「ええ、生きています。

刃の家は静かで、良い宿でした。」

主たちは驚き、顔をしかめた。

「何だと……？ なぜ切られなかった？」

刃たちは答えた。

「我らは眠っていたのだ。

あの兄弟たちは何もしなかった。」

## 虎の宿

冥界の王フン・カメーとヴクブ・カメーは言った。

「お前たちは刃の家を生き延びたようだな。  
ならば次の宿を与えよう。」

今度は**虎の家**（House of Jaguars）だ。  
今夜そこに泊まれ。

ただし、夜が明けるまで生きていられたらの話だ。」

兄弟が入ると、

その家は真っ暗で、

どこからか低い唸り声が聞こえた。

闇の中で光る瞳——

無数の虎（ジャガー）が  
兄弟たちを囲んでいた。

彼らの牙は白く光り、

口からは熱い息が漏れていた。

ジャガーたちは言った。

「ようこそ、人間の肉よ。

今夜はごちそうだ。」

兄弟は身を寄せ合い、

心の中で祈った。

フンアププーは、

自分の耳飾りを外して投げた。

それは貝殻でできた**飾り玉**で、

床に落ちると、かすかな光を放った。

兄弟は言った。

「この光は、我らの心のしるし。

どうか、この光を守る者よ、

牙をしまい、吠えるのをやめてくれ。」

するとジャガーたちは静まり、

光に目を奪われたように座り込んだ。

兄弟はさらに、

彼らにトウモロコシを少しずつ分け与えた。

「これは太陽の実だ。

食らうべきは我らの肉ではない、

天の実なのだ。」

ジャガーたちはそれを食べ、

そのうち眠りに落ちた。

夜が明けるころ、

冥界の主たちは扉を開けた。

「さあ、どうだ？　虎の餌になったか？」

だが兄弟は立っていた。

傷ひとつなく、静かに言った。

「虎たちは良き友となりました。  
今も眠っています。」

冥界の主たちは顔を歪め、  
憎しみを隠せなかった。

「何ということだ……。」

あの者たちは死を恐れぬのか！」

そして、さらに恐ろしい宿を命じた。

## 火の宿

そして、冥界の主フン・カメーとヴクブ・カメーは言った。

「お前たちは、虎の家でも死ななかつた。

ならば今度は、火の家で夜を過ごすがよい。

その中で、燃え尽きてしまおうだろう。」

こうして、フンアプーとイシユバランケーは命じられるまま、火の家に入った。

中に入ると、そこは燃えるような光で満ちていた。

四方の壁は赤く輝き、

床には燃え盛る薪が積み上げられていた。

炎が唸りを上げ、

煙が渦を巻き、

熱は彼らの肌を刺した。

けれど、英雄兄弟は恐れなかった。

フンアプーは小声で言った。

「我らが燃やすのではない。

火が我らを試しているのだ。」

イシユバランケーは答えた。

「ならば、火に心を奪われるな。

火を、見つめる者となろう。」

そこで兄弟は、火の中で燃えない木を一本だけ見つけ、その木の陰に身をひそめた。

火は夜通し燃え盛ったが、兄弟はその中で、煙にまみれながらじっと身を潜めていた。

彼らは燃えず、叫ばず、ただ静かに夜を待った。

夜が明けると、冥界の主たちは家の扉を開けた。

「さて、どうなったか見てみよう！」

と主たちは笑いながら叫んだ。

だが、兄弟は立っていた。服も焼けず、髪も焦げず、

火の中から、静かに姿を現した。

冥界の主たちは顔を見合わせた。

「これは……なぜだ？」

炎は彼らを食わなかったのか？」

彼らは怒りに満ち、次の試練を用意した。

## 氷の宿

火の家を無傷で出た兄弟を見て、冥界の主フン・カメーとヴクブ・カメーは怒りに満ちて言った。

「火でも焼けぬというなら、凍てつく氷で凍らせてやろう。今度こそ、息もできぬほど凍りつかせてやる。」

こうして、兄弟は氷の家（チュチュバル・ハ）へと送られた。

その家の中は、闇よりも白く、

床も壁も、透き通る氷でできていた。

天井からは氷の槍が垂れ下がり、

風が吹くたびに、切り裂くような音が響いた。

冷気は骨の髄までしみこみ、

吐く息は白く凍り、

指を動かすだけでも痛みが走った。

冥界の主たちは嘲笑って言った。

「今度こそ助かるまい。

火に勝っても、寒さには勝てぬのだ。」

兄弟は黙ってうなずいた。

そして、持っていたトウモロコシの葉を取り出し、

それで身を包み、体を寄せ合って座った。

彼らは、体の中の息を整え、

心を静かにして寒気を鎮めた。

やがて夜が更け、

氷の家の冷気がもっとも強くなったとき、

兄弟は祈りを口にした。

「大地の母よ、

風の精霊よ、

我らを見守りたまえ。

凍える我らの血を、眠りへと変えてくださるように。」

その言葉の後、氷の冷たさは和らいだ。

水の家の中に、静かな温もりが流れはじめた。

夜明けになると、冥界の主たちが扉を開けた。

「さて、凍った死体を見せてもらおうか。」

だが、そこにあったのは――

生きたままの兄弟の姿であった。

彼らは笑みを浮かべ、

凍りついた壁に手をあてて言った。

「氷もまた、我らを包んでくれた。」

冥界の主たちは驚き、顔をゆがめた。

「火でも氷でも死なぬとは……

これでは神々の威光が保てぬではないか。」

## コウモリの宿

水の宿をも生き延び、球技でも後手を踏んだ。冥界の主フン・カマーとヴクブ・カマーは、もはや怒りを隠せなかった。

「火も氷も通り抜けた……だが、今度こそ逃げ場はない。

闇の翼が待つコウモリの家へ行け。

その中で、バツァン神（カマゾッツ）の牙に喰われるがよい。」

こうして、兄弟は冥界の最後の試練の館――

コウモリの家（ズォツ・ハ / Zotz' Ha）へと導かれた。

家の中は、息をすることさえ恐ろしくなるほど暗かった。

空気は重く、風がひとたび動くとき、  
何千もの羽音が闇を震わせた。

その羽音は、夜そのものの鼓動のように響き、  
血と肉の匂いを運んでくる。

天井や壁には、巨大なコウモリの群れが逆さにぶら下がり、  
赤く光る眼をきらめかせていた。

その中心に立つのは――

カマゾッツ (Camazotz)、

刃のような鼻と牙を持つ、死の翼の神であった。

冥界の主たちは笑いながら言った。

「今宵、汝らはバツァンの食糧となろう。

朝まで生きていれば、その時は褒めてやろう。」

兄弟は答えず、

ただ静かに、球技に使う葦 (あし) で編まれた笛の殻の中へ身を隠した。

(それは、球技用の笛の胴とも、トウモロコシの茎の筒とも伝えられている)

夜が更けるにつれ、

闇の中を、無数の翼が行き交い、

そのたびに、風が肉を裂くような音を立てた。

時おり、鋭い牙が殻をかすめ、

兄弟の息を奪いそうになった。

フィンアフプーは低く言った。

「動くな、夜が明けるまで……」

カマゾッツは耳で生を聞き分ける。」

イシユバランケーは頷き、沈黙のまま息を殺した。

やがて夜明けが近づいた。

東の空がわずかに白むのを感じ、

兄フンアフプーはそっと首を出して様子を見ようとした。

その瞬間――

闇を裂く羽音が響き、

カマゾツツが飛びかかり、

フンアフプーの首を切り落とした。

その首は高く舞い上がり、

闇の中で消えた。

イシュバランケーは震えたが、泣かなかった。

彼は静かに首のない体を抱き、

こう言った。

「恐れるな、兄よ。

冥界の者どもが喜ぶのは、夜のうちだけ。

夜が明ければ、太陽の力が我らを取り戻す。」

その頃、冥界の神々はフンアフプーの首を拾い、

それを球技の試合場に持ち出した。

彼らはその首を、球のように上に掲げ、こう嘲笑った。

「見よ、これこそ英雄の結末だ！

この首を転がし、我らの勝利を祝うのだ！」

「これを今日の球技の球にせよ！」と命じた。

死の球技場

## 試合の当日

時をすこし、遡る。

「水の宿」に泊まった。その朝のこと

夜明け、彼らは外に出た。

霧が漂い、湿った空気が肌を包む。

その先に、冥界の球技場が見えていた。

黒い石の輪が並び、

大地は血の記憶を湛えている。

そこで、冥界の主たちが待っていた。

太陽のない空の下で、球は転がり、  
命と死のあいだに秩序が試される。

フンアフプーは静かに言った。

「今日、われらは試されるだろう。

だが忘れるな、血は流れても、光は絶えぬ。」

イシュバランケーは頷き、

吹き矢筒の中で目を閉じた。

彼らの胸の奥では、まだ小さな火が灯っていた。

それは氷を溶かした火、

そして、冥界を貫く光の始まりだった。

フン・カメー（第一の死）とヴクブ・カメー（第二の死）は言った。

「この試合では、球のような蛇を使うのだ。

あの者たちが触れた瞬間、牙を立てて噛み殺すがよい。」

こうして、冥界の主は毒蛇を丸めて球の形にし、試合の場に持ち込んだ。  
蛇は静かにどぐるを巻き、頭を隠して眠っているように見えた。

冥界の主は笑いながら言う。

「今日はこの球で遊ぼうではないか。よく跳ねるぞ、まるで生きているように！」

双子は互いに目を合わせた。

イシュバランケーは小声で兄に告げた。

「兄上、これは生きたものです。

炎のような舌を持つ。触れてはなりません。」

ファンアプーは頷き、静かに身を引く。

冥界の主たちが球を放つと、蛇は跳ね上がり、牙を剥いて唸った。球場の空気がざわめき、見物の冥界の従者たちはどよめいた。

双子は直接その「球」を打たず、

**魔術で蛇の動きを止める呪文**を唱えた。

イシュバランケーが指を鳴らすと、

蛇はピタリと動かなくなり、まるで本物の球のように転がった。

ファンアプーは笑って言った。

「なるほど、よく跳ねる球だな。

だが、少し眠らせてやるとちょうどいい。」

双子はそのまま蛇を蹴り返した。

蛇は冥界の主たちの足元に転がり、突然とぐろを解いて暴れだした。

今度は冥界の主たちが驚き、逃げ惑った。

蛇は彼らに噛みつこうと跳びかかり、球場は大混乱となった。

双子は静かに笛を吹き、蛇を呼び戻した。

蛇は従順に彼らの足元へ戻り、再び丸まって静かになった。

フンアフプーが言った。

「この球はよく跳ねるが、心が荒れている。次はもっと穏やかな球を使おう。」

冥界の主たちは恥をかき、怒りに震えた。

兄弟にはこう伝える。

今宵の宿は、**コウモリの家**だ。

心の中で、「バツァン神（カマゾツツ）の牙に喰われるがよい。」と思っていた。

## 一人で戦う朝

では、**コウモリの宿**に泊まった朝からの話をかたるとしよう。

夜がやっと薄らぎ、冥界の朝が訪れた。

それは光ではなく、灰色の風だった。

冥界の使者たちが来て言う。

「さあ、双子よ、球技場へ来い。

冥界の王たちが待っている。」

イシュバランケーは静かに頷いた。

兄の首は、冥界の主の下にあった。

それはまるで、朝日を待つ果実のようだった。

彼は心の中で兄に語りかけた。

「今日、われらは冥界を打ち負かす。

兄の首が球となり、

死が生を生むのだ。」

そして、彼は首から上が無い兄の体を抱え、静かに球技場へと歩き出した。

霧の中、冥界の地が唸りをあげる。  
それは生と死がまじわる音。  
秩序が試される音だった。

## 試合の準備

イシユバランケーは、戦意も知恵も失わなかった。  
風の声が彼に告げた。

「命は形を変える。  
すべては大地より生まれ、大地に還る。」

彼は川辺で一匹の亀を見つけた。  
その甲羅は太陽のように丸く、堅かった。

「お前に姿を借りよう。兄の首となり、再び動かせ。」

そう言って、亀を兄の首の位置に置いた。  
すると、柔らかな光が走り、  
甲羅が息をしはじめた。

フンアフプーは再び目を開けた。  
声は低く、しかし確かに響いた。

「行こう。まだ終わっていない。」

球場では、冥界の主たちが笑っていた。  
血の球が地を弾み、影が踊っていた。

## 兄の首

——冥界の空は暗く、風は血のように重かった。  
球戯の庭には、石壁と黒曜石の輪が並び、  
その中央に双子と冥界の主たちが向かい合って立っていた。

フィン・カメーとヴクブ・カメー、

冥界の主たちは笑いながら言った。

「今日の球は特別だ。」

おまえの兄のフンアフプーの首が球となる。

これで遊ぶがよい。」

そう言って放たれた球は、血のように赤く光り、  
跳ねるたびに低い呻きを立てた。

それは死の息を孕み、

冥界の大地を震わせた。

イシュバランケーはその音を聞きながら、  
目を伏せて祈るように言った。

「兄の魂は奪われていない。」

この球は命を待っているだけだ。」

試合が始まると、

冥界の主たちは嘲るように球を打った。

球は宙を舞い、血のしぶきのように光った。

イシュバランケーは静かにそれを受け止め、

あえて軽く弾き返した。

球は地を転がり、

球戯場の外へと跳ねていった。

その先には、柏（カシ）の林があった。

木の根元に一匹の兎が潜んでいた。

それは、光の使いであり、欺きの神でもあった。

イシュバランケーが小声で呼ぶ。

「行け、森の影を駆ける。」

兎は頷き、ふいに飛び出した。

その兎を、球が転がっていると勘違いして、冥界の主たちは叫んだ。

「逃げたぞ！あの球を捕まえろ！」

主たちが騒ぎ立てて林へ駆けていく。

黒い羽根飾りが揺れ、

地面がざわめく。

その隙に、イシュバランケーは

柏の側に転がっている兄の首へと近づいた。

それは乾いた骸のようで、

月の光を失った太陽のようだった。

イシュバランケーは両手でその首を抱き、静かに囁いた。

「戻れ、兄よ。血の川を越えたように、

今こそ魂を取り戻すのだ。」

その瞬間、首が温かくなり、

目に微かな光が戻った。

兄フンアフプーは微笑み、

「また一緒に球を打てるな」と言った。

イシュバランケーは兄の首を体に戻し、

代わりに兄の首だった亀を同じ場所に置いた。

亀は光り、形は生きた首のように見えた。

王たちが戻ってきたとき、

亀は血のような汁を垂らしながら微笑み、

冥界の主たちは騙された。

球戯の場に再び二人が立つと、

球は今度、太陽のように弾んだ。

それは再生の鼓動だった。

——こうして死は欺かれ、  
命は再び球となって跳ねた。  
冥界の静寂は破れ、  
天地のあいだに新たな律が響いた。  
それは神々の笑い声にも似て、  
朝の太陽の約束を告げる音であった。

## 火あぶり

——冥界シバルバの夜は深く、  
風は血と煙のにおいを運んでいた。  
双子英雄フンアフプーとイシュバランケーは、  
何日にもわたり冥界の主たちと球を打ち合ったが、  
勝敗はつかなかった。

ヴクブ・カメーは怒り、  
骨のような指で玉座を叩いた。

「もうよい。おまえたちの知恵も力も見飽きた。

この冥界に太陽の光は不要だ。

火の中で、その血を我らに捧げよ。」

双子は互いに顔を見合わせ、  
微笑んだ。

それは敗北の笑みではなく、  
何かを悟った者の静かな顔であった。

その夜、冥界の広場には薪が積まれ、  
黒い炎がゆらめいた。  
死の王たちは環となり、  
燃え上がる火の中に双子を投げ込んだ。

火は唸り声をあげ、  
煙は空へと昇った。

地上では、兄弟の母が  
家の中でじっと見つめていた。

そこには、双子が出立の朝に植えたトウモロコシがあった。

「これが枯れたなら、わたしたちは冥界で滅んだということだ」と  
フニアププーが言っていた。

朝霧の中、

トウモロコシは青く伸び、露をまとっていた。

だが昼になると、

空が曇り、南から焦げた匂いが風に乗った。

その瞬間、

トウモロコシの葉はしゅるしゅると音を立て、

根が乾いてしおれた。

母イシュキクは涙を流し、

「命は燃やされた」と呟いた。

冥界では、

火が消えたあと、

王たちは灰と骨をかき集め、

それを粉にして川に投げ込んだ。

流れはゆるやかに灰を運び、

月の光を受けて銀の帯のように輝いた。

新たな光

## 復活

火あぶりから三日ののち、  
その川辺に魚が集まり、  
灰を喰らって光り出した。  
水面には二つの影が映った——  
それは兄弟の魂であった。  
彼らは魚となり、のちに人の姿を取り戻す。

そして、母イシュキクの家では、  
枯れたはずのトウモロコシの根から  
新しい芽が出始めた。  
それは細く、しかし確かに、  
地を押し上げて光を求めた。

——こうして、  
火に焼かれた命は川で蘇り、  
枯れた穂は再び天を目指した。  
死と再生の輪は閉じ、また開く。  
それが神々の秩序であり、  
トウモロコシの誓いであった。

## 芸人

——夜と昼の境が曖昧な冥界。  
灰色の川が音もなく流れ、死者の影がその上を渡っていった。  
そこに、一度は灰となったはずの二つの魂が甦った。  
彼らは魚の姿から人の姿へと変わり、

誰もその正体を知らなかった。  
けれど、彼らの歩く跡には小さな光が宿り、  
枯れた草は青く息を吹き返した。

そのふたり――

かつての双子英雄フンアププーとイシュバランケーは、  
今は名を捨て、旅する芸人として冥界をさまよった。

彼らは、

燃えた薪を手に取り、それを冷たい水に沈めて再び炎を灯した。

焼けた骨を粉にして撒けば、鳥が生まれ、歌い始めた。

死者たちは驚き、

「この者たちは誰だ、死をも笑いに変える」と囁き合った。

双子は静かに、ただ芸を続けた。

一人が自らを切り裂き、もう一人がその身を蘇らせる。

やがて交互に死に、交互に甦った。

それは死と再生の儀、

火と水のあいだにある神々の遊びのようであった。

この噂は風に乗る、

冥界の奥深く――黒曜石の玉座に座るフン・カメーと

その弟ヴクブ・カメーの耳にも届いた。

王たちは興味を覚えた。

「死を弄ぶ者がいるという。」

我らの国で死を超える者など、許せぬが……

見てみたい。」

使者が派遣され、

「冥界の主がお呼びだ」と告げた。

そのとき、

双子は川辺の暗がりに座っていた。

月の光が水面を照らし、

ふたりの影が一つに重なった。

イシュバランケーが小声で言った。  
「ついに呼ばれたね、兄さん。」  
フンアフプーはうなずいた。

「ああ、これで最後の試練が来る。  
だが、死を恐れることはない。  
死はただ、次の扉を開くだけだ。」

ふたりは立ち上がり、  
手を取り合って闇の奥へと歩き出した。  
背後で、枯れたはずの草がふたたび芽吹き、  
冥界の風がざわめいた。

——こうして、双子は芸をもって冥界の心臓に近づいた。  
死と再生の境を越える者として。  
彼らの歩みは、夜明け前の星のように静かで、  
しかし確かに、新しい光の始まりを告げていた。

## 冥界の行方

——冥界シバルバの広間。  
黒曜石の柱が並び、血の香りが漂う。  
その中央に、冥界の主フン・カメーとヴクブ・カメーが座していた。  
周囲には沈黙する死者たち。  
誰も息をせず、時間さえ凍っていた。

そこへ、双子の芸人が現れた。  
火と灰から生まれたふたり——  
かつて冥界に敗れ、いま再び甦った英雄、  
フンアフプーとイシュバランケーである。

彼らの姿は人のようで人でなく、  
影のようで光を宿していた。

声は静かで、けれども響きは大地の奥まで届いた。

「偉大なる王よ。

我らは冥界の道化。

死をも笑いに変える者です。

どうか、芸をお許しく下さい。」

冥界の主たちは笑った。

「よかろう。見せてみよ。

死者を愚弄する芸がどんなものか。」

——そして、双子の舞が始まった。

フンアフプーが火の中に飛び込み、

その体は炎に包まれ、灰となった。

イシュバランケーはその灰を拾い集め、

息を吹きかけた。

灰は舞い上がり、光となって彼の兄が立ち上がる。

生き返ったのだ。

次に、イシュバランケーが自らの胸を裂き、

心臓を地に落とした。

すると心臓はトウモロコシの種となり、芽を出し、

若葉が揺れ、花が咲き、実が実った。

フンアフプーはそれを摘み取り、土に埋めて歌った。

「命は土に戻り、またそこから生まれる。

死は終わりではない。」

冥界の主たちは驚き、

その神々しい技に心を奪われた。

とヴクブ・カメーが前のめりに言った。

「我らもその芸を見たい。

我らにも死と復活を見せよ！」

双子は静かにうなずいた。

「望みのままに。」

だが、王よ、我らがしても蘇ることはありません。  
本当に、よろしいのですか？」

ヴクブ・カメーは笑った。

「冥界の主が死ぬものか。やってみよ。」

そのとき、双子は目を合わせた。  
火が再び灯り、闇がゆらめいた。

フンアフプーが両手を上げ、  
イシュバランケーが火を吹いた。  
冥界の主の体は燃え、影が溶けた。  
やがて、灰だけが残った。

双子はその灰を拾わなかった。  
沈黙が広間を包み、  
冥界の壁にひびが入った。

フン・カメーが叫んだ。  
「ヴクブ・カメーをどうした！」  
だが、次の瞬間、彼もまた切り裂かれ、  
闇に溶けた。

——冥界は震えた。  
死の国の支配者が滅び、  
暗闇が息をひそめた。

双子はその場に立ち、  
ゆっくりと手を取り合った。

「これで秩序は戻る。  
死は、命のためにある。」

## 太陽と月

——冥界の主たちが滅びたあと、  
沈黙が世界を包んだ。

かつて血と嘆きが満ちていたシバルバの広間には、  
今は灰と光がただ漂っていた。

その中央に、双子の英雄——フンアフプーとイシュバランケー——が立っていた。

彼らの体には傷もなく、影もなかった。

その瞳には火のような光が宿り、

彼らの呼吸が、夜と昼の境を揺らしていた。

フンアフプーが言った。

「我らの務めは終わった。

冥界の闇は、もう人々を支配しない。」

イシュバランケーが応えた。

「けれども、兄よ。

闇はなくなるらない。

ただ、形を変えて、光とともに生き続けるのだ。」

二人は見上げた。

冥界の天井——それはまだ閉ざされた大地の裏側。

そこには一筋の光が、静かに走っていた。

まるで、天の裂け目がふたりを呼んでいるようだった。

彼らは火を集めた。

かつて自分たちを焼いたその炎を、

今度は自らの意志で抱きしめた。

「これが、我らの最後の試み。」

死を超えて、生を照らそう。」

そう言うと、二人は火の中へ歩み入った。

炎は唸り、渦を巻いた。

灰が舞い、冥界の壁が震えた。

やがて、その炎の中から二つの光が昇った。

ひとつは金色に燃え、

ひとつは銀に揺れた。

冥界の門を越え、

大地を突き抜け、

天の高みに昇る。

民が地上で目を覚ますと、

空の果てに新しい光があった。

それは初めての朝であり、最初の夜だった。

「兄は太陽となり、

弟は月となった。」

トウモロコシの畑がその光を浴びて芽吹いた。

血の川は静まり、

球技場の石は赤く輝いた。

そして神々の声が風に乗って囁いた。

——「死は終わりではない。

犠牲は光を生む。

秩序は混沌の中から再び立ち上がる。」

こうして、双子の魂は天を巡り、

太陽と月として世界を見守るようになった。

昼と夜が交わるそのたびに、

彼らの物語は、風の中で語り継がれるのだった。

人間の創造

## 原料を探す

——夜と昼が初めて交わったころ、  
空はまだ若く、大地はその形を整えようとしていた。  
冥界の炎から昇った二つの光——太陽と月——は、  
静かに天をめぐり、世界に時の鼓動を与えていた。

地上には、英雄双子の母が暮らしていた。  
その名はイシュキク。

彼女の家の中には、一本のトウモロコシが育っていた。

それは英雄双子が冥界へ向かう前に植えたものだった。

「もし枯れたなら、わたしたちは滅びたと思ってくれ」——

そう言い残して出ていった息子たちの言葉どおり、

一度はその葉がしおれ、土に伏した。

けれども、ある朝ふたたび芽吹き、

青い光を帯びて立ち上がったのだ。

イシュキクはそのトウモロコシを見守りながら、  
静かに祈っていた。

「この命が、あの子たちの息の証ですように。」

ある夜、風がざわめいた。

風の中に、遠い雷のような声が交じった。

それは天の創造主たちの声だった。

ハツアヨム——「天空の心」は高らかに言った。

「我らは再び人をつくらねばならぬ。

泥は崩れ、木は声をもたぬ。

だが血をもち、祈る者を、いま生み出すときが来た。」

ククルカン——「羽ある蛇」は風のかたちを取り、

ハリツァナマとトコワヒ——「造る者」「形づくる者」——とともに

地上を歩き、命の種を探した。

そして、イシュキクの家の前で足を止めた。

その家の中には、光るように実るトウモロコシがあった。

その穂は夜でも輝き、風に揺れるたびに

まるで息をしているようだった。

ハツァヨムが声をかけた。

「おお、イシュキクよ。命を宿した者よ。

おまえの家に育つこのトウモロコシを、我らに授けてほしい。

それをもって、新しい人間を形づくる。」

イシュキクはトウモロコシの葉を撫でた。

「これはあの子たちの残したものです。

彼らは火の中へ入り、

いまは天で太陽と月になりました。

このトウモロコシは、あの子たちの心と同じ。

どうか大切にしてください。」

創造主たちはうなずいた。

ハツァヨムは穂を摘み取った。

## 人の世

——夜の霧が晴れ、空にまだ名のない星が瞬くころ、

創造主たちは静かに集まった。

ハツァヨム——天の心。

ククルカン——羽ある蛇。

ハリツァナマ——つくる者。

トコワヒ——形づくる者。

彼らの前には

柔らかく光るトウモロコシが並んでいた。  
それは冥界から戻らぬ双子の残した命の印。  
土の匂いとともに、太陽の記憶を宿していた。

「これこそ、世界を織りなおす糸だ。」

ハツァヨムが言った。

ククルカンは風の姿で穂を撫で、

金と白の粒を一つひとつ取り分けた。

「この実には、血のように甘い力がある。」

ハリツァナマは白を置き、

トコワヒは水を汲んできた。

その水は朝霧のしずく、

まだ太陽の息が触れぬ清らかな水だった。

彼らは静かに捏ね始めた。

大地のうねりのように、

空の雷鳴のように、

手のひらが命をこね合わせていく。

ハツァヨムが風を吹かせると、

トウモロコシの粉が舞い、

粒は肌となり、香りは息となった。

ククルカンがその胸に風を送り、

ハリツァナマが骨を形づくり、

トコワヒが目を描いた。

やがて、人は息をした。

目を開き、空を見上げた。

その瞳には、まだ夜明け前の星の光が映っていた。

「これが我らの子、

言葉をもつ者、

祈る者、

トウモロコシの血を継ぐ者だ。」

創造主たちはそう告げて、沈黙した。  
世界はその瞬間、静まり返った。

——こうして、人間はトウモロコシから生まれた。  
その体は大地の粉、  
その血は太陽の汁、  
その心は風のささやき。

人は初めて言葉を発した。

\*\*\*それは祈りでもあり、歌でもあった。

「わたしたちはあなたがたの子です。

われらの声で、あなたの名を呼びます。」\*\*\*

## 後書き

冥界の主たちは、水を見守る者だった

むかし、地の底には、

静かに光る川が流れていた。

それは地上の人々が見たことのない水——  
暗く、深く、そして永遠に動く水だった。

その地下の川を「シバルバ」と呼んだ。

そこには二人の王がいて、

彼らは水の流れと、

乾いた地上とのあいだにある**秩序**を守っていた。

雨が長く止まれば、人々は彼らに祈りを捧げ、

心臓の鼓動を「地の水」に聴かせた。

血は水とひとつになり、

その香りが天へと昇ると、雲が集まり、雨が降る。

冥界の王たちは恐ろしい姿に見えた。

だが、彼らは怒りの神ではなく、

**地下の貯水を守る番人**だったのだ。

地上の者たちが水を浪費し、

祈りを忘れると、彼らは扉を閉じ、

川を沈黙させた。

だから人々は、暦にしたがって祈りを捧げた。

太陽が365日の旅を終えるとき、

祭司たちはトウモロコシを手に、

新しい年の水を願った。

また、260日の聖なる暦に合わせて、

母たちは子の誕生を祝い、

農夫は土を耕した。

そのすべてが、冥界の主たちに届く祈りだった。

やがて、季節の輪が巡るたびに、

地下の川が満ち、地上の泉が湧いた。

それは、神々と人々が交わす**約束の証**だった。

人々はこう語った――

「冥界とは、死者の国ではない。

それは、水の生まれるところ。

地の奥で神々が水を分け合い、

わたしたちの命を見守る場所。」

だから今も、

セノーテの底に向かって祈る声がある。

暗い水の奥で、王たちはその声を聴いている。

彼らは怒らず、眠らず、

ただ水の秩序を守りつつづけているのだ。



---

共同体の書

---

著 者 おうぼく

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---